

# ネイビースーツの存在

中野香織 II 文 (KAZUKO NAKANO)

いまや色をあらわすことばでもあるネイビーは、本来、海軍を意味する。

英国海軍の制服の色、すなわち紫と灰色をかすかに含む濃青色がそのままネイビーという色の名になったわけだが、そもそも海軍の制服の色を決めた事件があった。1837年の「ヴィクトリア女王、軍艦ブレイザー号訪問」である。だらしなない恰好の部下をなんとかさきと見せようと考えたブレイザー号の艦長は、急場しのぎの略礼服を考案し、彼らに着用させる。英国海軍のボタンをつけたダークブルーの上着である。以後この服はほかの軍艦でも制服として採用されることになっ

た。このエピソードはしばしばブレザーの起源として語られるのだが、ここでは、海軍のブルー、ネイビーブルーという色の起源に注目したい。これは、きのうまでのだらしなさをひきずる男をもたちまちぱりりと引き立てる即効性を発揮した色だったのである。

そういうわけで、フレッシュヤーズともまことに相性のよいネイビーである。黒よりも軽やかなのに陰影に富み、グレーよりもあらたまった信頼感があり、昼のビジネスにも夜のセミフォーマルにも通用する。しかし、この万能性には落とし穴がある。仕立てや素材のよしあしをもっとも容赦なく見せて

しまるのがネイビーなのである。逆にいえば、エグゼクティブがこぞってネイビーを選ぶ理由のひとつも、まさにその点にある。ネイビーは仕立てや素材への投資の成果を鮮明に見せるパワースーツともなるのである。その典型が映画「ウォール街」(1987年)でマイケル・ダグラスが着たネイビー・スーツであろう。初々しさ、信頼感、そして富と権力。その幅広い印象のパロメーターのどこ(複数可)に針がおかれるかは着る人しだい。ネイビーが知性の色とされるのは、着る人のセンスが最大限に問われる色であるからにはほかならない。

**Baldessarini**  
バルデサリーニ

## スティックから生まれる気品

イタリアン・クラシックの仕立て工房で作られる、ヒューゴ・ボスのハイエンドラインのスーツ。ネイビー地にダークストライプが入ったユニークな生地を使った3ボタンのデザイン。肩先が高くなったシャープなショルダーラインが特徴的。ホワイトシャツにネイビーのタイという、シンプルなかにも深みのあるコーディネート。  
スーツ ¥231,000、シャツ ¥35,700、タイ ¥15,750  
(すべてバルデサリーニ/ヒューゴ・ボス ジャパン ☎0120-700-608)